

# 平成29年度 商工農林水産委員会県内視察報告書

商工農林水産委員会  
委員長 成田 光雄

1 視察期間 平成29年11月27日(月)

2 視察先及び視察事項

(1) やまふじぶどう園

「ぶどうの生産から加工、販売までの6次産業化の取組み」

(2) ベリー・ベリー・ヤミー

「富山県内初となるブルーベリーのポット栽培による取組み（観光農園、6次産業化）」

(3) 株式会社 笑農和

「IT農業を通じたブランディング戦略や販売マッチングの取組み」

3 視察参加委員

委員長	成田	光雄
副委員長	高田	真里
委員	泉	英之
〃	小西	直樹
〃	橋本	雅雄
〃	佐藤	則寿
〃	金厚	有豊
〃	柞山	数男

4 随行職員

議事調査課副主幹	石黒	隆司
議事調査課主任	平野	霞

## 5 視察概要

### やまふじぶどう園

#### (1) 視察事項

ぶどうの生産から加工、販売までの6次産業化の取組み

#### (2) 視察の目的

ぶどうの生産から加工、販売までを行う6次産業化の取組みにより、毎年多くの客が訪れており、6次産業化の成功例とも言えるやまふじぶどう園を視察することで、本市における今後の6次産業化の取組みの参考とするもの。

#### (3) 取組みの概要

やまふじぶどう園は昭和2年に北陸で最も古いぶどう園として開園し、90年近く経った現在では、山藤ファミリーが一丸となってぶどうの栽培からワインの醸造、販売までを一貫して行っている。

6ヘクタールのぶどう畑には、ワイン用品種も含めて約40種類以上のぶどうを栽培しており、8月初旬から10月初旬には観光ぶどう狩りを行っている。残留農薬ゼロのため洗う必要はなく、安心でおいしいぶどうを食べていただけるよう努めている。ワインにおいては、昭和50年にワイン部門を株式会社とし、年間約6万本を生産している。

園内にあるカフェ・レストランでは、園内で収穫されたぶどうや製造されたワインを使用した料理をいただくこともでき、売店ではワインの試飲・販売のほか、ギフトセットやワイングッズの販売も行っている。

その他、園内ではバーベキューやウェディングを行うこともでき、収穫祭などさまざまなイベントも行われている。

#### (4) 所感

〔成田委員長〕

今年で90年を迎え、社長以下7名の家族経営で地元の料理にあうワインを造っている県内唯一のワイナリーを視察。残念ながら中山間地での営業など、あまり知られていない。全国的に富山のお酒は有名だが、富山産のワインも全国の方々に知ってもらう必要がある。富山ブランドの充実として行政との連携やサポートできる施策がないか検討が必要。また、観光農園としても魅力的な場所であり今後も期待ができる施設なので、観光面でも支援策がないか調査が必要である。

〔高田副委員長〕

昭和2年開園という西日本で2番目の歴史を持つ「やまふじぶどう園」。当初は中山間地で水がなく、水田ができずにぶどう果樹園を開始。そこから、早い段階でワイン

製造に取り組み、県内初の観光ぶどう園へと展開されている。まさにグリーンツーリズムのさきがけであり、今もなお多売せずに「富山市」にお越しいただいて入手してもらおうという手法を大事にされている。富山市が取り組むべき「とやまブランド」と、来訪者の増加への努力を自社でしておられる姿に感謝の想いである。

〔泉委員〕

創業92年、富山県内初のぶどう農園として現在まで存在し続けている事実に深く感銘を受けました。“ワイン製造販売”、“レストラン運営”、“ぶどう狩り・バーベキュー広場”の展開など、ぶどうに関連する殆どの収益構造を備え、比率は64%、13%、13%と6次産業化という名前が発生するよりも遙か前に完成形の体を成していた運営手法には、家族の絆による中小企業の底力が感じられました。

また、ぶどう生産の過度な拡大を抑え、自分たちの身の丈に合った販売手法に徹し、県内重視の営業展開も共感を覚える視察であったと感じました。

〔小西委員〕

三代にわたり、県民によるこぼれるぶどう園の開放（ぶどう狩り、カフェ&レストランなど）・販売、ワイン製造の少量・多種・限定販売・県民の好みの追求に徹している。

また、家族と近隣住民の雇用、休耕田を利用など多くの面で地域に貢献する、企業経営姿勢に大いに感銘を受けた。

自然の影響など、未知数の困難も考えられるが、やまふじさんの堅実・一面頑固な経営は富山の農業の未来の一端を担う農業企業として頑張っていたいただきたい。

〔橋本委員〕

やまふじぶどう園は、北陸で最も古いぶどう園であり、ワイナリーでもある。昭和2年、ぶどう園が開園され、ワイン醸造は昭和8年から行われている。富山市内にあり、国道から1本入るだけだが、不勉強の私は全く知らなかった。

訪ねてみて、観光農園として素晴らしい施設だと感じた。家族を中心に社長以下7名で、ぶどう栽培からワイン醸造、販売まで行っている。まさに、生産者の顔が見えるアットホームな施設である。

現在、宿泊ができるゲストルームを計画しているらしい。ワイン好き同士、夜更けまで語り合える空間づくりは夢がある。

〔佐藤委員〕

まさに家内工業で、ワイナリーを営むが、ぶどう栽培90年ワイン醸造84年というその歴史と伝統、そして郷土愛と、地元「富山」を全国へさらに世界へと発信していこうとの情熱や開拓精神は、開園者、初代社長、現社長、そして次女、さらに孫へと継承されつつあり、そのほほえましい光景を目にすることができた。

小さいからこそ、プレミアム感を持たせるワインづくりは、ここにしかない味と、

富山ならではの食材にマッチしたワインを求め抜くことで、食の富山をアピールし観光資源ともなる。また後継者は信念を貫く頼もしき逸材でもあった。

〔金厚委員〕

昭和初期からの歴史をもつ「やまふじぶどう園」であるが、あくまで家族で経営してきたが、これからは観光農園等に移行していくべきである。雇用等を考えれば、市からの助成等を考えるべきである。

〔柞山委員〕

昭和2年の開業で現在4代目、西日本側でも随一の歴史がある。家族経営の利点を生かし、規模拡大もされ、今ワイン6万本の販売を主力に観光農園として、低価でのワイン販売を可能としている。富山ならではの食材にマッチしたワイン作りを目指し、地元の特化した販売を考えている。富山市営農サポート事業にも支援して頂き、一方で利用もしている。中山間地域で雇用も生まれ、今後、経営モデルとしたい。

(1) 視察事項

富山県内初となるブルーベリーのポット栽培による取組み（観光農園、6次産業化）

(2) 視察の目的

休耕地・遊休地を有効活用でき、収穫期間の短縮も可能となるなど、さまざまなメリットのあるポット栽培を本市の耕作放棄地増大の解決策として参考とするもの。

(3) 取組みの概要

富山県で初となるポット栽培によるブルーベリー観光農園を運営しており、植え込み本数は約1,000鉢と富山県最大で、品種は30品目以上の品ぞろえとなっている。

ブルーベリー狩りを楽しめるほか、ブルーベリースイーツの販売も行っている。

園内にはツリーハウスもあり、子どもたちがブルーベリー狩りだけではなく、遊びも楽しめるような環境となっている。

(4) 所感

〔成田委員長〕

21世紀型の新しい農業「ポット栽培」で育てているブルーベリー農園を視察。

家族や友だちと楽しくくつろげる雰囲気のある園内で、今後も遊具施設や設備を拡充する計画で、さらに発展し期待できる施設ですが、こちらも中山間地にあり、交通面が不便なところであり市民に知られていないのが残念ですが、これからは新規来場者の広がり十分に期待できる施設です。

今後は、他の観光農園などの施設との連携も重要だと思います。

〔高田副委員長〕

子どもの「ゲームセンターに行きたい」という言葉から反省する思いで、脱サラをしてブルーベリー栽培を始める経営者。富山出身でもなく、土地もいくつも探し、直に地主さんと交渉し現在の場所に観光農園として開園。その行動力も素晴らしいうえ、富山市でも課題になっている耕作放棄地の利活用に十分参考になるケースである。初期投資2,000万円くらい（うち1,000万円補助金活用）で普段は1人で農園管理をしているため人件費も繁忙期のみ。今後はキッズ体験農業構想もあるとのこと元気な農業の参考になる。

〔泉委員〕

千葉県出身で脱サラから農業展開へと踏み出した勇気を想う時、まずは“人の人生とは何ぞや”というところに興味を抱きました。簡単に農業参入と言うものの、土地の取得から苗木の入手、防風・防鳥柵の設置等の初期投資額は高額で、行政側の補助

が無ければ新規参入はあり得ないとも感じました。また、直植えのリスクを回してポット栽培を選択するなど、安易な思い付き程度の参入では無く、残りの生涯を賭けた強い意志が無ければ成らない事も理解出来ました。天候や病害虫対策などの苦労を伺い、農業の大変さを感じた案件だったと思います。

〔小西委員〕

脱サラ、生まれ故郷を離れ、富山でブルーベリー観光農園という新しい取り組み（ポット栽培、シート敷き、水・肥料の点滴ノズルなど、安定・安心・省力など）を堅実に前進されていることは素晴らしいことです。

ブルーベリーの採取時期が限られ、ブルーベリー狩り期間は3カ月と短いのですが、アウトドア公園やログハウスなどで長期間、来園できる農園に向けてがんばってください。

行政から遊園地施設にも助成できる制度も考慮していく必要があるのでは。

〔橋本委員〕

ベリー・ベリー・ヤミーは、本格的なブルーベリー観光農園である。食べ放題になるブルーベリー狩りは面白い試みだ。

ブルーベリーは、日本国内では栽培適地がほとんどないといわれる。それをポット栽培にすることによって、良質な果実を安定して、安心して食することを可能にしている。

課題は、収穫時期が限られることであろう。しかし、経営者には夢がある。ブルーベリー栽培で満足しているわけではない。地域の自然を学び楽しむ「自然王国」の設立こそ彼の目指すものである。

ぜひ応援したい。夢のある話に行政が乗るのも悪くない。

〔佐藤委員〕

いわゆる脱サラをして未経験の農業に転じた経営者、開業から5年が経過し、その夢が形になり始めていた。

かつて休耕田となっていた山深いその土地で、未来を担う子どもたちが、食べ放題のブルーベリーをほおぼりながら歓声を上げる。富山市内が一望できるその場所には、ポット栽培のブルーベリーが整然と並ぶ観光農園と化していた。

「このポットで迷路を作り遊ばせたい。イチゴ農園もしたい。」キッズニアで歓喜していた我が子が転職を決意させたとの経営方針、皆が幼少時代を思い出し夢が広がるような素晴らしい国になることを後押ししたい。

〔金厚委員〕

「やまふじぶどう園」と違った形で、1人経営、通常は1人勤務、土日は5～6人体制である。観光農園としてもっと大規模に成長する場合は、販路の拡大・製造の拡大等に努力が必要と思われる。

〔柞山委員〕

自らの子育ての中で、自然と接し、生きることへの学びの場が必要と考え、脱サラをして、休耕田を借り、ブルーベリー栽培を始めた。人生そこまでやるか、との思いもあるが感服した。現在6,000㎡、45品種、1,000鉢を栽培し、入園料を取って観光農園を運営している。ツリーハウスやレストルームがあるが、今後、ピザ焼窯や迷路なども設置し、子どもたちの自然体験施設を充実するとのこと。経営的には厳しいものもあるが、頑張ってもらいたい。

(1) 視察事項

I T農業を通じたブランディング戦略や販売マッチングの取組み

(2) 視察の目的

高齢化、担い手不足、耕作放棄地の増大等が問題となっている今日の農業において、スマート農業（ロボット技術やI C Tを活用して超省力・高品質生産を実現する新たな農業）における先進的な取組みを視察することにより、本市の今後の農業の参考とするもの。

(3) 取組みの概要

①スマート水田サービス paditch（パディッチ）の開発・運営として、水稻における工程をスマートに管理し、次世代のスマート水田の実現に向けたサービス②農業におけるI Tの活用によるコンサルティングとして、生産計画の開示、原価管理、生産履歴などのI T化、③商品企画・マーケティングに関するコンサルティングとして、商品企画、HPやフェイスブックの開設支援、ショッピングサイト構築支援、④米・玄米及び農産物の加工品の販売、インターネット販売並びに輸出入、⑤システム開発などを行っている。

(4) 所感

〔成田委員長〕

スマート水田を実現するサービス機械をはじめI Tを活用して農業支援を実践している企業を視察。水稻農家向け水位調整サービス「パディッチ」の動作を確認してきました。初期段階でデータや評価につながる資料がないので、実用化には時間がかかると思われます。そこで農業支援策のひとつとして、行政がこのサービスを試験的に活用し実績やデータを収集し期待できる効果、またそれ以上の成果ができれば設備投資についての補助金制度等を活用し、農家の方への普及促進につながります。これを機にスマート農業化が進めば様々な課題解決につながるので、今後の調査・研究課題としては期待できる内容でした。

〔高田副委員長〕

「100年後も美味しいお米を食べられる未来へ」。農業者の65%が70歳以上である現実を目のあたりにし、少ない人員でも可能にするためI Tを活用した「スマート水田」への取組みをすすめられ、一番作業時間の多い水管理をできる装置を開発。①水門の開閉が遠隔で可能に②深夜の水入れをタイマーで設定可能に③水が抜けると異常アラートでお知らせ④細目な入水管理が可能に、等最先端のI T技術を導入。これにより、若者の農業への参画や、少ない人員での農業への取組みが期待できると思われる。



〔泉委員〕

集落営農法人の現状を捉え、農業の省力化を助けるITの新事業として、今後の農業を支えるコンセプトには興味深いものを感じました。ただ、一反10万円程度の稲作による収益を鑑みた時、11万円の水管理装置を普及させるには、行政側の援助が不可欠なのではと思います。ITと農業を結びつけたいと願う若き社長の出現が、農業を進化させ、10年後には今より大きな企業に成長してほしいと感じました。“汗水たらしてナンボ”の農業従事者の心を如何に掴むか、粘り強い姿勢と共に将来展望を明確にし、更なるステップに期待したいと思います。

〔小西委員〕

水田の水管理に多くの時間がさかれることに驚かされた。

スマート水田サービス paditch の現地とパワーポイントでの説明を受けたが、農業作業時間の短縮に大いに役立つことは理解できたけれども、現状の設備コストで普及ができるか疑問に思った。

設備コストの削減と、実績を積み上げることで普及していく必要だと感じる。

〔橋本委員〕

笑農和の企業理念は「IT農業を通じて笑顔の人の和を創り社会に貢献する」であり、社名がその理念を表している。

米作りは「長年の経験と勘が頼り」とされ、高齢化と後継者不足が問題になっているという。管理する水田が広範囲に及ぶと、今までと同じやり方では、品質の低下にも繋がりがねない。

そこで、ITを取り入れることにより、効率的に農作業が行えるのではないかと考えた。PCやスマホによる遠隔操作で、水門の自動開閉を可能とした「パディッチ」を開発したが、これはまだ始まりだ。

100年先の農業を考えている笑農和さんに期待したい。

〔佐藤委員〕

農業の中でも稲作の効率化に挑むベンチャー企業の取組みを学んだ。我が地域にでもその課題は数多く聞かれ、未来は悲観的な展望しか語られてこなかったのが現実だ。

改めて大規模化したコメ作りにおいてもその労力の4分の1は、水位や水温などの「水管理」であることを伺い、先人の知恵と知識を集積し少しでも自動化して100年後も美味しいお米が食べられる国であらねばならないとの同社の思いを知り、自己反省をした。

パディッチもまだ課題が多いと思われるが、ビッグデータや除草ロボットの活用など、進化するIT農業を期待したい。

〔柞山委員〕

先人の知識と知恵をIT活用により次世代へ繋ぐとして、様々なシステム開発を手がけている。今回、スマートフォンを使った給水弁を遠隔操作する、パディッチを紹介していただいた。実際、水田での実証もあり、便利なものである。しかし、コスト的には人手でするのと比較してもまだ高価なものである。将来農業の研究として大いに期待したい。

やまふじぶどう園





ベリー・ベリー・ヤミー

